

〈本文〉

十一番

左 勝 頭巾づきん

山里や頭巾とるべき人もなし

京 観水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな哉

籠言

目にふれぬ山中の客、そゞろに愛

せらるゝ楓林ふうりんもあるか。右は、目に

立て猶たちすぎき

冬野ゝ法師、人には

いかゞおもはるゝ心ばへもありなん。

左まさるべし。

〈現代語訳〉

左 勝 頭巾

冬の山里では木こりや猟師などの山賤のほかに出会う人もなく、京の街中のようにわざわざ頭巾をとって挨拶する人もいないことだ。

* 「頭巾」は和歌には用例が見られないが、俳諧では『犬子集』以下に頻出する。

『花草』『せわ焼草』『通俗志』等に兼三冬、『毛吹草』『増山井』等に十月、『袖かがみ』に十一月とする。『類船集』に「猟師はほくそづきんといふものをかぶると也。貴人高位の前にてはかぶらず。途中にて人にあふては先まづきんとる事ぞ」、『和漢三才図会』には「風寒ヲ厭フ褻用之物、之ヲ著テ人ニ対スルハ甚ダ不礼也」とあるように、防寒用の日常着で、これをかぶったままで人と対面することは無礼であった。「山里」は和歌以来多くの用例を持つ。そこは出家者や隠者、社会からの逸脱者などの住む場所であり、『古今集』に「春立てど花もにほはぬ山里は物憂かる音に鶯ぞ鳴く」（春上）、「山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつ」（秋上）、「山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草も枯れぬと思へば」（冬）とあるように、遅い春の訪れや、秋冬の寂しさが詠まれた。『類船集』「山里」の項はこれらの和歌を踏まえ、「鶯のこゑに春を知」「冬ぞさびしき」等の付合語を持つ。京の人、観水が冬の山里を訪れた際に目にした、粗野な山人の実風景であろうか。

右

禿頭に頭巾もかぶらずに外出する出家の姿が見られる、冬の野中であることよ。

* 『古今集』の「いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞくむ」（雑

上)に代表されるように、和歌における「野中」は、播磨国印南野にあったという「野中の清水」をさす場合がほとんどであるが、俳諧においては一般的な「野の中」を示す語として用いられている。

〈判詞〉

左句は、冬の山里に、ふだんは山人が目にしないうような都の客がわざわざやって来たのは、杜牧の「山行」に「停_レ車坐愛楓林晚、霜葉紅_ニ於_二二月華_一」と詠まれるように、そこに何となく心惹かれる楓林があつてのことだろうか。右句は荒れた冬野を、禿頭に頭巾もかぶらず目立ったさまで行く法師のさまで、「法師ほど羨ましくないものはない。「人には木の端のように思われる」と清少納言が『枕草子』に書いたのはもつともだ」と『徒然草』にあるように、この句には(人から木石のように思われている僧侶が)頭巾もかぶらないで外出する姿を、人はどのように見るだろうかという思いを込めているのである。右句にはこのような作意が感じられるので左句のほうが勝っている。

* 左句に対する「そぞろに愛せらるゝ楓林もあるか」との評は、『三体詩』の杜牧詩「山行」、「遠上_ニ寒山_一石径斜 白雲生処有_二人家_一 停_レ車坐愛楓林晚 霜葉紅_ニ於_二二月華_一」の三句目によるもので、わざわざ冬の山中を訪れる人があること理由を、そこに心惹かれる楓林のようなものがあるからだろうと推し量っている。また、右句への「人にはいかゞおもはるゝ心ばへもありなん」とは、『枕草子』の「思はん子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。たゞ木はしなどのやうに思ひたることいとほしけれ」を踏まえた『徒然草』の一節、「法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるゝよ」と清少納言が書ける、さることぞかし」が思い起こされる句で、人に木の端のやうに扱われる僧侶が、冬の荒野を頭巾もかぶらずに禿頭を丸出しに行く姿を、一体あんなに目立って、人からどう思われるだろうかと難じる気持ちが込められているのだろうと推測する。このように右句には作意が感じられる点を難として、左句を勝としたものであろう。また左句を「目にふれぬ」、右句を「目に立て」と対照的に捉えた点も注目される。